

【15】 結 語

[1] 以上釈尊の出家・成道・入滅年齢と生誕（入胎・出胎）・出家・成道・入滅の日付について調査してきた。一応の結論は次のようになる。

[1-1] まず出家・成道・入滅年齢については、原始仏教聖典の指し示す結論は次のようになる。

出家＝満29歳

苦行＝満6年、足掛け7年

成道＝満35歳

入滅＝満80歳

[1-2] 入胎・出胎・出家・成道・入滅の日付は大きく分けると南方伝承と北方伝承の二つとなるが、南方伝承の方が合理的であって、本研究の基本的姿勢とも合致するからこれに従うと次のようになる。

入胎 出胎前年のアーサール八月の満月の日、すなわち4月15日

出胎 ヴェーサーカ月の満月の日、すなわち2月15日

出家 満29歳のアーサール八月の満月の日、すなわち4月15日

成道 満35歳のヴェーサーカ月の満月の日、すなわち2月15日

入滅 満80歳のヴェーサーカ月の満月の日、すなわち2月15日

[2] 以上の年齢計算について誕生を「入胎」からとするか、「出胎」からとするかという問題を保留してきた。

[2-1] すでに【6】の[7-1]で、『ピガンデー氏 緬甸仏伝』の云うところを検討した際に、もし入胎日や出家日が『ピガンデー氏 緬甸仏伝』のいうとおりであるとすれば、これがもっとも合理的に原始聖典資料を解釈できると述べた。そしてその結果やはりその月日に従うべきであるという結論に達したのであるから、「入胎」からする「満年齢」の数え方を採用すべきことはいうまでもないが、なお念のために若干の検証を施しておく。

試みに入胎からと出胎からの満年齢の月単位でこの対照表を作ってみると次のようになる（年は『ピガンデー氏 緬甸仏伝』によった）。

	入胎から起算	出胎から起算
入胎	67.4.15	
出胎	68.2.15	10月
出家	96.4.15	29歳0月
		28歳2月
		* 苦行の年数は共に6年10月
成道	103.2.15	35歳10月
		35歳0月
入滅	148.2.15	80歳10月
		80歳0月

[2-2] この表から知られる通り、年単位では成道年齢も入滅年齢も、入胎から起算しても出胎から起算しても影響はない。ともに満年齢では35歳と80歳になるからである⁽¹⁾。

しかし問題は出家年齢である。もし出胎を採用するとすると、満28歳2月となってしまう。したがって入胎からの満年齢でなければならない。

[2-3] またここで思い出されるのが“Mahāparinibbāna-s.”などに記される釈尊の最晩年の年齢に関する記事である。もし出胎から年齢を数えると、すべての伝承は出胎日と入滅日を同じ日とするのであるから、ちょうど80歳の誕生日に入滅されたことになる。したがって厳密に言えば、その3ヶ月前の入涅槃の宣言の時点や、さらにその前の雨安居に入られたときは当然ながらまだ満79歳であったということになる。そこでこれまではそれは「概数」を表したものと解釈してきだが、しかし入胎から数える年齢法に基づけば、雨安居に入るのは入胎日であるアサール八月の満月の日（4月15日）の翌日（4月16日）であるから、まさにちょうど満80歳になられたことになる。とするならば、雨安居に入られたときに「80歳となった」というのはまさにぴったりと符合することになる。

[2-4] しかも仏教では人間の一生は「出胎」から始まるのではなく、「入胎」から始まると考えていた。「比丘らよ、母の胎内で (mātu kucchismiṃ) 第一の心が生じ (paṭhamam cittam uppannam)、第一の識が現れた (paṭhamam viññānam pātubhūtam)、これによって誕生とする (tadupādāya sā v'assa jāti)、(したがって) 比丘らよ、入胎から20を (gabbhavisam) 具足戒とすることを認める」⁽¹⁾と定められたのであり、また「殺人罪」の「人」を「人身 (manussaviggaho) とは、母の胎内で (mātu kucchismiṃ) 第一の心が生じ (paṭhamam cittam uppannam)、第一の識が現れて (paṭhamam viññānam pātubhūtam) 死に至るまで (yāva maraṇakālā)、この間を人身という (etthantare eso manussaviggaho nāma)」⁽²⁾と定義するから、墮胎は明確に「殺人罪」とされるのである。また説一切有部が十二縁起を三世両重因果として解釈する際、「入胎」を今世の始まりとするのもこれによる。

(1) Vinaya vol. I p.093、『四分律』巻17 大正22 p.680下、巻34 p.811上、『五分律』巻8 大正22 p.061中、『根本説一切有部毘奈耶』巻41 大正23 p.853下

(2) Vinaya vol. III p.073、『四分律』巻2 大正22 p.576下、『五分律』巻2 大正22 p.008中、『十誦律』巻2 大正23 p.008下、『根本説一切有部毘奈耶』巻7 大正23 p.660中

[2-5] ただしビルマではビルマ暦（太陰暦）のカソー月（Kahson）の満月に仏の生誕・成道・初転法輪・入滅を記念するウェーサカ祭が行われる⁽¹⁾。これはヴェーサーカ月の満月の日に相当し、タイでもスリランカでも同じ日に同じ祭りを行う⁽²⁾。すなわち2月15日に釈尊の誕生日を祝うわけであるから、誕生日を「出胎」で考えているわけである。となると上記の「誕生日」を入胎とする伝統と齟齬を来すことになるが、人間の一生の始まりを仏教教理の上から「入胎」としようが、一般的な感覚では「出胎」が自然であって、しかも普通は「入胎日」は正確には知りえないのであるから、この場合は「出胎」の祝いと考えておけばよいであろう。

しかもウェーサカ祭の眼目は「入滅」の記念日が主な趣旨であって、成道も、初転法輪も、そして「出胎」も同じ日であるから、合わせて一緒にお祭りすると考えてもよいのではなかろうか。

- (1) 生野善応『ビルマ仏教—その実態と修行』（昭和50年3月 大蔵出版社）p.266
- (2) Kenneth E. Wills “Thai Buddhism---Its Rites and Activities”（Bangkok, 1975）p.072、
中村元『ゴータマ・ブツダⅡ』（中村元選集 [決定版] 第12巻 1992年5月 春秋社）p.35

5

[3] いずれにしても歴史的事実がどうであったのかはわからない。しかし本研究はパ漢共通資料を第1次水準とし、もしパ漢において相違がある場合にはパーリ資料を尊重するというのが基本的姿勢である。誕生や出家・成道・入滅などの月日に関する原始仏教聖典資料が存在しないから、資料価値としてはかなり低下すると云わなければならないが、それでも同じ水準の資料価値である「仏伝経典」のうちの漢・パどちらを尊重するかとなれば、南方伝承を尊重せざるを得ないであろう。それがパーリ聖典の編集者たちの釈尊イメージをより多く伝えているであろうからである。しかもそれで原始仏教聖典資料と齟齬を来さず、むしろ苦行年数や雨安居時点での年齢が合理的に理解できるのであるからなおさらである。

そこで本研究の立場としては、次を結論とする。

- (1) 年齢は入胎＝アーサール八月の満月の日（4月15日）から起算する満年齢とする。
したがって誕生日は4月15日。
- (2) 出胎は年齢10ヶ月のヴェーサーカ月の満月の日（2月15日）。
- (3) 出家は満29歳のアーサール八月の満月の日（4月15日）、すなわち29回目の誕生日当日。
- (4) 成道は満35歳10ヶ月のヴェーサーカ月の満月の日（2月15日）。
- (5) 入滅は満80歳10ヶ月のヴェーサーカ月の満月の日（2月15日）。